1 女流義太夫の海外公演実施の経験から

女流義太夫の三味線演奏家として筆者は様々な海外演奏を行ってきました。これらの公演で演奏したレパートリーは大きく3種に分かれます。

1. 伝統的な古典曲
2. 伝統的な手法に基づいた新作
3. 伝統的な手法にとらわれず，表現の可能性を追求した新作

奏者にとって，主に1は伝統曲の演奏技量，2は伝統曲の構造の理解，3は独創性や表現力が問われます。本稿では，その1〜3にあてまはる経験の例を述べます。

1 伝統的な古典曲の演奏

海外で伝統的な古典曲を演奏する時は，ほぼ国内と同じ様式で演奏することが求められます。

義太夫節は三味線音楽の一種で語りの要素が強く，ストーリーを追う作品が殆どです。女性の義太夫節の奏者は基本的に浄瑠璃で演奏します。海外演奏では現地の言葉で字幕を出すことが多いものの，出さない場合もあります。

筆者は国際交流基金助成事業としてフランスで2回，女流義太夫の素浄瑠璃公演を行いました。2007年11月の公演（パリ：日本文化会館，イエール：数カ所にて公演）や，2011年3月の公演（パリ：フランス国立東洋語学校（INALCO）・国際大学都市のMaison du Japon，その他マノスクやリモージュで公演，France Musiqueでラジオ出演）では，INALCO公演以外は全て字幕を出しませんでした。INALCOでフランス語の字幕を出したのは，先方の先生から「自分で字幕を作って映したい」との要望があったためです。

字幕がない場合，演奏前にフランス語のパンフレットを配付し，口頭でネイティヴによるフランス語の解説を施しました。公演では《一谷嫩軍記（いちのたにふたばぐんき）》組討の段を演奏しましたが，聴いているだけで場面が分かった，感情の動きが分かったので充分満足した，との言葉をいただきました。

字幕の有無は設備や観客層などを確認しながら現地スタッフなどと相談して決めます。

2 伝統的な手法に基づいた新作の作品例

曲名：蛇の王妃エグレ（Eglė žalčių karalienė）

編成：竹本越孝（義太夫節浄瑠璃），鶴澤三寿々（義太夫三味線・作詞・作曲／本稿筆者），花崎杜季女（地唄舞・振付）

2022年の欧州文化首都（European Capitals of Culture）の開催地リトアニア共和国，カウナスで行われる“the Japan Days in Kaunas WA!!”内で同年4月に演奏する作品です。この作品は日本の伝統芸能のチーム（地唄舞と義太夫節）と，カウナスの合唱団Choir Sonorosとのコラボレーション演奏会で演奏します。

開催にあたり，プログラムは次の5種の曲を取り入れて現地スタッフに提案しました。

①義太夫節の古典的な舞踊曲
②義太夫節の古典的手法による新作舞踊曲
③リトアニアの伝説を日本の伝統芸能の手法で表現した舞踊曲
④リトアニアの合唱団と日本の伝統芸能チームとのコラボレーション
⑤リトアニアの合唱団による演奏

「蛇の王妃エグレ」は③にあたり，題材はリトアニアの有名な伝説です。以下あらすじです。

人間の娘エグレに心惹かれた海底に住む蛇の王は，彼女の水浴び中に服を盗み，返して欲しければ結婚するように迫ります。結局蛇王と結婚したエグレは海底の宮殿で不自由なく暮らし，子供も生まれます。しかし地上の人間界が懐かしくな

り，一時的に地上へ帰ることを願い出ます。

蛇王は承知し，海底に戻る際に迎えを呼ぶための呪文を教えます。子供と一緒に地上へ赴いたエグレは親族と再会しましたが，エグレを海底へ戻したくないエグレの親族は呪文をエグレから聞き出し，迎えに来た蛇王を殺してしまいます。

何も知らないエグレが海底に戻るために呪文を唱えると，蛇王が来る代わりに真っ赤な血潮が吹き出しました。夫の死を知ったエグレは悲しみに暮れ，そのまま海辺に生えるトウヒの木に，子供達も別の木に変わってしまいました。

リトアニアではトウヒの木をエグレといいます。着衣を奪う題材は羽衣伝説に，人間と人間でないものとの婚姻によって生じる英雄譚や悲劇は日本にも多く存在します。この作品を 10〜15 分程度の舞にするにはどうすれば良いかを検討した結果，夢幻能の様式を用いることにしました。

旅人（ワキ）が海岸の松の葉の擦れる音に惹かれて近寄ると，エグレの霊（シテ）が現れて身の上を語り，舞うという構成です。旅人は義太夫節の浄瑠璃で表現し，エグレの霊を浄瑠璃と舞で表現することにしました。

海辺の松や，波がデザインされた着物でエグレの世界を表現する予定です。

義太夫節には「謡ガカリ」という能の旋律を取り入れた節があります。それを適所に用いたほか，エグレの精が登場した時の箇所のみに教会旋法を取り入れて変化を付け，その他は基本的に義太夫節の古典的な節付けを施しました。

結局木になってしまったエグレの気持ちはどうだったのか，この伝説では詳細が語られません。この余韻が，とても夢幻能の様式で表現するのにふさわしい題材だったと思っています。

このエグレの伝説を含んだプログラムの提案をしたことは，リトアニアからの招聘に繋がる大きな原動力になったと感じています。

また④のリトアニアの合唱団とのコラボレーションは，予め合唱団に演奏動画や楽譜の送付をお願いし，そこに振付やアンサンブルを加えて送り返し，現地で合わせることにしました。

3 伝統的な手法にとらわれない，表現の可能性を追求した新作の演奏例

プロジェクト名：空手×テクノロジープロジェクト「KATA」

組 織：Gene Coleman（作 曲），Adam Vidiksis（打楽器，デジタル技術），中村明一（尺八），鶴澤三寿々（義太夫三味線・声／本稿筆者）によるコラボレーション企画

編成：声，義太夫三味線，尺八，打楽器，電子楽器，笙 2，Vn.1，Vn.2，Va，Vc，箏，Electric Guitar，Video

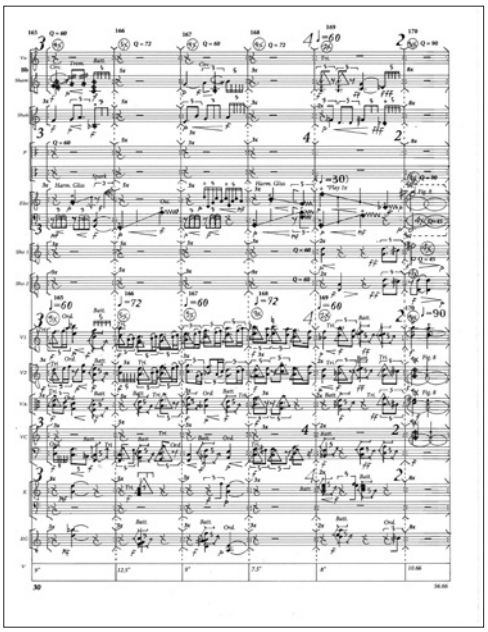
「KATA」は日本の武道，音楽，映像，モーションセンサー他，様々なデジタル技術を組み合わせるコラボレーションプロジェクトで，空手の動きや演奏者の動きを音楽にデジタル変換した演奏と生演奏とのアンサンブルに，ダンス，映像を組み合わせて制作されました。

「KATA」は空手の競技「形」のことです。形は仮想の敵に対する攻撃技と防御技を一連の流れとして組み合わせた演武です。スピードや力強さに緩急を加え，下半身を安定させることによって生じる動きは，まさに日本の伝統芸能，伝統音楽における体の使い方と共通しています。

この事業は 2020 年度の日米友好基金（The Japan-US Friendship Commission ＝ JUSFC）と全米芸術基金（The National Endowment for the Arts ＝ NEA）による日米芸術家交換プログラムにおける，日米 Creative Artists 企画です。

この曲は元来2020年のオリンピックに合わせて東京で演奏される予定でしたが，COVID-19の影響でオリンピックが延期となり，事業期間も特別に2021年9月まで延長されました。その結果，中村と鶴澤（筆者）が2021年8月にフィラデルフィアに赴き，プロジェクトメンバーとディスカッション，演奏，録音，録画等を実施，その他もアメリカで現地アーティストたちによる演奏，録音や動画編集などが行われました。

「KATA」は，人間の体の外部や内部の動きを演奏によって表現した作品です。記譜は五線譜によるものでしたが，通常の伝統的な奏法だけでは全く対応することの出来ない曲でした。

通常，三味線の奏法は「撥で弾く」「撥で掬う」「指ではじく」といった奏法を組み合わせます。しかし「KATA」はむしろ「撥で弦を擦る」，具体的には「弦の上を撥で図形を描きながら擦る音を立てる」という奏法が多く，強い擦弦音によってループを描く音を立てたり，三角形や四角形を描いて三連，四連のリズムで擦ったり，瞬時に通常奏法に戻したりすることが要求されました。これらの動きは主に「形」における筋肉や神経の刺激を体内で伝える信号の動きを表します。

三味線の弦は絹糸を撚った後に糊をかけて仕上げられますが，特に義太夫三味線の弦は「浄るり糸」という，三味線の弦の中でも極めて太い弦になるよう絹糸を多く強く撚った丈夫なものです。その上を強く撥で擦って音を立てることは可能ですが，象牙製の撥は磨り減り，傷が付きます。そのため使用する撥については相当迷いましたが，結局合成素材の撥では音がうまく出せず，象牙製の撥を使うことにしました。

三味線の奏法は三味線の胴を右足の大腿部と右手の前腕部の2点（写真の〇）で挟んで楽器を支え，左手をフリーにして演奏することが前提です。しかしこの奏法では右手の可動域は三味線の胴に触れている前腕部の一点を軸として弧を描く範囲しかなく，弦の上を撥で様々な図形を描きながら擦ることは出来ません。

そのため，①右手の撥で図形を描く時には，棹を左手で摑んでしっかり支え，右の前腕部を完全に胴から離して右手を自由に動かす，②通常奏法に戻る時には右の前腕部で胴をしっかり支え，左手を自由に動けるようにして演奏する，という①と②の奏法を組み合わせて演奏しました。

奏者にとっては非常にトリッキーな動きですが，かつて演奏したことのあるGeneの曲には既にこの奏法が含まれていたうえ，オリンピック選手ならこのぐらいのトリッキーな動きはするだろう，と楽観的に想像しながら切り抜けました。洋服で演奏しましたが，長い袖の着物でなかったからこそ可能な奏法だったのかもしれません。

ちなみにリハーサルを実施したテンプル大学は，2021年8月までの間にCOVID対策で強力な空調シス

テムを整え，稼働させていました。しかし録音スタジオでは稼働音はNG，さらに映像撮影もあったため，換気をしながら録音，録画を行い，動画の公開で事業を完成させました。

日本の伝統音楽に携わる者にとっても2020年に生じたCOVID-19拡大による被害は凄まじいものでした。舞台が次々と中止，延期されたことへの解決策の一つとして，多くの実演家が動画を作成，編集，公開することを検討し，挑戦する必要に迫られました。その結果，2020年はICT（Information and Communication Technology）に取り組む必要性，その限界などの問題に正面から向き合わざるを得なくなり，伝統芸能のあり方を考え直す重要な機会になったと思われます。

2020年度の文化庁の文化活動の継続支援事業でも，ICT化が含まれる事業は，含まれない事業に比べて経費中の助成の割合を2/3から3/4へと優遇するなど，ICT化が推奨されました。

このような芸能の大規模なオンライン化によって，国境や立地の差という距離のハードルは更に低くなったといえましょう。現に「KATA」事業では，メンバーが日米にいながらにして，オンラインイベントやラジオ出演などが行われました。

前述の例のうち2と3はCOVID禍中に遂行された作品です。特に海外公演の場合は会議を行ったり，動画を送ったり等，ICTは欠かせない手段となりました。しかしここで感じられるのは，海外公演と国内公演との間には，内容としてほとんど差がないのではないか，ということです。

例えば1のように，字幕や解説を加える，などを検討するのは海外公演の際に必要と思いがちですが，むしろ国内公演でも日本語の字幕を出す，あるいは解説を行ってから鑑賞に入る，という啓発的な伝統芸能公演は増えてきています。

筆者は2007年から文化庁の学校巡回公演に様々な形で参加していますが，「二度とない貴重な経験をさせていただき，ありがとうございました。」と挨拶される場合があります。しかし，次世代に繋げるための事業であるにもかかわらず「二度とない」と言われてしまっては形無しです。

そのため，随所に「演者も聴衆も伝統芸能の担い手である」こと，「この体験を覚えていること」や「誰かに話すこと」自体が伝統芸能を担っている，つまり「演者だけではなく今の生徒自身もすでに伝統芸能の担い手である」という表現を随所に入れるよう心がけています。

伝統に関するこのような本質的な考え方は，国境や世代を超えて理解してもらえるものです。我々は何を手段として伝統芸能を伝えていくのか，その伝え方にふさわしい様々なツールを今後も臆せず試していきたいと考えています。

【参考文献】
European Commission Culture and Creativity
https://ec.europa.eu/culture/（2021年8月20日閲覧）
EU・ジャパンフェスト日本委員会
https://www.eu-japanfest.org/n-culturalcapital/culturalcapital.html（2021年8月20日閲覧）
2020日米芸術家交換プログラム／KATA-Karate × Digital Technology
https://www.nichibei-artists.org/project01（2021年9月10日閲覧）

（太田暁子）